資料3

資料3　今後の取組を考える上での論点整理

今後の取組を考える上での論点

国土交通省

背景１：これまで、河川水辺の国勢調査や多自然川づくりなど、様々な施策を進めてきた。

論点１：これらの施策の中で、どのような課題があり、今後どのように改善していくべきか？

背景２：これまでの河川環境に関する取組は、不十分（施策の問題？　施策の意図が現場に十分浸透していない？）との声がある。

論点２：各河川整備の現場において、「河川環境の保全と整備」の取組が進むための仕組みとして何が必要か？

今後の取組を考える上での論点

背景３：現状では、河川整備基本方針や河川整備計画において、計画高水流量や洪水調節量などは、定量目標を記載しているが、河川環境の整備と保全に関する目標は、定性的に記載している。また、流水の正常な機能を維持するため必要な流量は、定量目標を記載しているが、変動する数値としては記載していない。

論点３：河川整備基本方針や河川整備計画には、どの程度のことまで記載すべきか？

・河川整備（生物の生息・生育・繁殖環境の保全・再生・創出）の目標

・河川整備（生物の生息・生育・繁殖環境の保全・再生・創出）の内容

・流水の正常な機能を維持するため必要な流量　など

背景４：気候変動の影響に伴い水害が激甚化・頻発化している。

繰り返しの大災害は、生命・財産へのダメージだけではなく、河川や流域の環境にとってもダメージが大きい（適度な攪乱は重要ながら）。

論点４：治水安全度の向上とともに、良好な河川環境を保全・再生・創出する上で、どのような河川整備が望まれるか？

今後の取組を考える上での論点

国土交通省

背景５：河川管理施設等の老朽化が進行している。

施設の損壊は、治水・利水などの機能を喪失させるだけでなく、河川環境にとってもダメージが大きい。

論点５：今後、施設の大更新時代を迎える中で、より一層の施設の維持管理や更新を計画的に進める必要があるが、施設の更新時は、河川環境の再生・創出のチャンスでもあるので、どのようなことを目指すべきか？

背景６：生産年齢人口が減少するとともに、労働時間の制約も厳格化されてきている。

管理者の担い手不足が深刻になる中でも、治水・利水・河川環境などの多様な機能を維持・向上させ、適切に管理していくための体制を確保する必要がある。

論点６：DXをはじめ様々な技術の進展があるが、担い手不足などの背景を踏まえて省力化・省人化を図っていく上で、有効な手段はないか？

今後の取組を考える上での論点

背景７：流域治水の取組を通じて、治水に関しては、流域と連携して取り組む機運が高まっている。

生物の移動範囲は河川内にとどまるものではないので、環境は、河川内だけでなく、流域全体で考えていく必要がある。

論点７：流域と連携する機運の高まりを、環境の改善に、どのように結びつけていくべきか？

背景８：2030年までのネイチャーポジティブの実現などの世界の潮流も踏まえ、民間企業にも環境への取組の機運が高まっている。

論点８：将来の担い手不足を踏まえ、民間企業との連携（特に、民間企業の自発的な取組）を進めていく上で、どのような仕組みが必要か？